ヒバクと健康 LETTER 通巻 73 2023-6

2023 年 6 月号

一般社団法人 被曝と健康研究プロジェクト

http://hibakutokenkou.net/

今フクシマの声を

第3集

311子ども甲状腺がん裁判

東京電力福島第一発電所の
事故によって放出された
放射性物質によって被曝し、
甲状腺がんになった若者が
東京電力を訴えています。
応援してください。

ホームページ

311甲状腺がん子ども支援ネット

https:/311support.net

上記団体へのご寄付： ゆうちょ銀行 店名 〇一九 当座 口座番号 0393240

姓名、ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ、寄付名義人＝自身、団体、匿名など記入。詳しくは HP に。

事実は100の評論に勝る。

政府は、「フクシマの教訓」と言いつのって、

放射線の被曝基準　年間１ミリシーベルトを無きものにし、

廃棄物を海洋に投げ捨て、原発の再稼働、新設を行おうとしている。

いま、フクシマの声を聴くべきではないのか。勇気あるフクシマの若者の声を。

７人の口頭弁論陳述の紹介は今回で終了する。第3集（編集責任・田代真人）

「LETTER」の内容についてのご意見は下記へお寄せください。
一般社団法人 被曝と健康研究プロジェクト 代表　田代真人
〒325-0302 栃木県那須町高久丙４０７－９９７
Ｅメール：masa03to@gmail.com

同封の振替用紙は、当法人へのご寄付用です。よろしくお願い致します。

◆

令和４年（ワ）第１８８０号 ３１１子ども甲状腺がん裁判（損害賠償請求事件） 原告 １～６
被告 東京電力ホールディングス株式会社

意見陳述要旨 ２０２２年（令和４年）５月１９日　　原告２

あの日は中学校の卒業式でした。 友だちと「これで最後なんだねー」と何気ない会話をして、部活の後輩や友だ ちとデジカメで写真をたくさん撮りました。そのとき、少し雪が降っていたような気がします。

地震が来た時、友だちとビデオ通話で卒業式の話をしていました。最初は、「地震だ」と余裕がありましたが、ボールペンが頭に落ちてきて、揺れが一気に強くなりました。「やばい！」という声が聞こえて、ビデオ通話が切れました。「家が潰れる。」揺れが収まるまで、長い地獄のような時間が続きました。

原発事故を意識したのは、原発が爆発した時です。「放射能で空がピンク色になる」 そんな噂を耳にしましたが、そんなことは起きず、危機感もなく過ごしていました。

３月１６日は高校の合格発表でした。 地震の影響で電車が止まっていたので中学校で合格発表を聞きました。歩いて 学校に行き、発表を聞いた後、友達と昇降口の外でずっと立ち話をして、歩いて自宅に戻りましたが、

その日、放射線量がとても高かったことを私は全く知りませんでした。

甲状腺がんは県民健康調査で見つかりました。 この時の記憶は今でも鮮明に覚えています。

その日は、新しい服とサンダルを履いて、母の運転で、検査会場に向かいました。 検査は複数の医師が担当していました。検査時間は長かったのか。短かったのか。首にエコーを当てた医師の顔が一瞬曇った

ように見えたのは気のせいだったのか。検査は念入りでした。

私の後に呼ばれた人は、すでに検査が終わっていました。母に「あなただけ時 間がかかったね。」と言われ、「もしかして、がんがあるかもね」と冗談めかしながら会場を後にしました。この時はまさか、精密検査が必要になるとは思いませんでした。 精密検査を受けた病院にはたくさんの人がいました。この時、少し嫌な予感がしました。 血液検査を受け、エコーをしました。 やっぱり何かおかしい。自分でも気づいていました。

そして、ついに穿刺吸引細胞診をすることになりました。この時には、確信がありました。私は甲状腺がんなんだと。 わたしの場合、吸引する細胞の組織が硬くなっていたため、なかなか細胞が取れません。首に長い針を刺す恐怖心と早く終わってほしいと言う気持ちが増すなか、3 回目でようやく細胞を取ることができました。

１０日後、検査結果を知る日がやってきました。あの細胞診の結果です。病院には、また、たくさんの人がいました。結果は甲状腺がんでした。 ただ、医師は甲状腺がんとは言わず、遠回しに「手術が必要」と説明しました。 その時、「手術しないと 23 歳までしか生きられない」と言われたことがショックで今でも忘れられません。

手術の前日の夜は、全く眠ることができませんでした。不安でいっぱいで、泣きたくても涙も出ませんでした。でも、これで治るならと思い、手術を受けました。 手術の前より手術の後が大変でした。 目を覚ますと、だるさがあり、発熱もありました。麻酔が合わず、夜中に吐いたり、気持ちが悪く、今になっても鮮明に思い出せるほど、苦しい経験でした。 今も時折、夢で手術や、入院、治療の悪夢を見ることがあります。 手術の後は、声が枯れ、3 ヶ月くらいは声が出にくくなってしまいました。

病気を心配した家族の反対もあり、大学は第一志望の東京の大学ではなく、近県の大学に入学しました。でも、その大学も長くは通えませんでした。甲状腺がんが再発したためです。 大学に入った後、初めての定期健診で再発が見つかって、大学を辞めざるをえませんでした。 「治っていなかったんだ」「しかも肺にも転移しているんだ」とてもやりきれない気持ちでした。「治らなかった、悔しい。」この気持ちをどこにぶつけていいかわかりませんでした。 「今度こそ、あまり長くは生きられないかもしれない」そう思い詰めました。 1回目で手術の辛さがわかっていたので、 また同じ苦しみを味わうのかと憂鬱になりました。手術は予定した時間より長引き、リンパ節への転移が多かったので傷も大きくなりました。 1回目と同様、麻酔が合わず夜中に吐き、痰を吸引するのがすごく苦しかった。 2回目の手術をしてから、鎖骨付近の感覚がなくなり、今でも触ると違和感が残ったままです。

手術跡について、自殺未遂でもしたのかと心無い言葉を言われたことがありま す。自分でも思ってもみなかったことを言われてとてもショックを受けました。 手術跡は一生消えません。それからは常に、傷が隠れる服を選ぶようになりま した。 手術の後、肺転移の病巣を治療するため、 アイソトープ治療も受けることになりました。 高濃度の放射性ヨウ素の入ったカプセルを飲んで、がん細胞を内部被曝させる治療です。 1回目と 2 回目は外来で治療を行いました。

この治療は、放射性ヨウ素が体内に入るため、まわりの人を被ばくさせてしま います。 病院で投薬後、自宅で隔離生活をしましたが、 家族を被ばくさせてしまうのではないかと不安でした。2回もヨウ素を飲みましたが、がんは消えませんでした。 3回目はもっと大量のヨウ素を服用するため入院することになりました。 病室は長い白い廊下を通り、何回も扉をくぐらないといけない所でした。 至る所に黄色と赤の放射線マークが貼ってあり、 ここは病院だけど、危険区域なんだと感じました。病室には、指定されたもの、 指定された数しか持ち込めません。汚染するものが増えるからです。 病室に、看護師は入って来ません。 医師が1日1回、検診に入ってくるだけです。 その医師も被ばくを覚悟で検診してくれると思うととても申し訳ない気持ちになりました。 私のせいで誰かを犠牲にできないと感じました。

薬を持って医師が 2、3 人、病室に来ました。 薬は円柱型のプラスチックケースのような入れ物に入っていました。 薬を飲むのは、時間との勝負です。 医師はピンセットで白っぽいカプセルの薬を取り出し、空の紙コップに入れ、 私に手渡します。 医師は即座に病室を出ていき、鉛の扉を閉めると、スピーカーを通して扉越しに飲む合図を出します。私は薬を手に持っていた水と一緒にいっきに飲み込みました。 飲んだ後は、扉越しに口の中を確認され、放射線を測る機械をお腹付近にかざされて、お腹に入ったことを確認すると、ベッドに横になるように指示されま す。 すると、スピーカー越しに医師から、 15 分おきに体の向きを変えるように指示する声が聞こえてきました。食事は、テレビモニターを通じて見せられ、 残さずに食べられるか確認し、汚染するものが増えないように食べられる分しか入れてもらえません。 その夜中、それまではなんともなかったのに、急に吐き気が襲ってきました。 すごく気持ち悪い。なかなか治らず、焦って、 ナースコールを押しましたが、看護師は来てくれません。 ここで吐いたらいけないと思い、必死でトイレへ向かいました。 吐いたことをナースコールで伝えても吐き気どめが処方されるだけでした。 時計は夜中の２時過ぎを回り、 よく眠れませんでした。

次の日から、食欲が完全に無くなり、 食事ではなく、薬だけ病室に入れてもらうことのほうが多かったです。２日目 も 1、2 回吐いてしまいました。 私は、それまでほとんど吐いたことがなく、吐くのが下手だったため、眼圧がかかり、 片方の目の血管が切れ、目が真っ赤になっていました。扉越しに、看護師が目の状態を確認し、目薬を処方してもらいました。 病室から出られるまでの間は、気分が悪く、ただただ時間が過ぎるのを待っていました。 病室には、クーラーのような四角い形をした放射能測定装置が、壁の天井近く にありました。その装置の表面の右下には数値を示す表示窓があり、私が近づ くと数値がすごく上がり、離れるとまた数値が下がりました。

こんなふうに３日間過ごし、ついに病室から出られる時が来ました。 パジャマなど身につけていたものは全て鉛のゴミ箱に捨て、ロッカーにしまっ ていた服に着替えて、鉛の扉を開け、看護師と一緒に長い廊下といくつもの扉を通って、外に出ました。

治療後は、唾液がでにくいという症状に悩まされ、水分の少ない食べ物が飲み 込みづらくなり、味覚が変わってしまいました。 この入院は、私にとってあまりにも過酷な治療でした。二度と受けたくありません。 そんな辛い思いをしたのに、治療はうまくいきませんでした。治療効果が出なかったことは、とても辛く、その時間が無駄になってしまったとも感じました。 以前は、治るために治療を頑張ろうと思っていましたが、今は「少しでも病気が進行しなければいいな」と思うようになりました。 病気になってから、将来の夢よりも、治療を最優先してきました。治療で大学も、将来の仕事につなげようとしていた勉強も、楽しみにしていたコンサートも行けなくなり、全部諦めてしまいました。

でも、本当は大学を辞めたくなかった。卒業したかった。大学を卒業して、自分の得意な分野で就職して働いてみたかった。新卒で「就活」をしてみたかっ た。友達と「就活どうだった？」とか、たわいもない会話をしたりして、大学生活を送ってみたかった。 今では、それは叶わぬ夢になってしまいましたが、どうしても諦めきれません。 一緒に中学や高校を卒業した友達は、もう大学を卒業し、就職をして、安定した生活を送っています。 そんな友達をどうしても羨望の眼差しでみてしまう。 友達を妬んだりはしたくないのに、そういう感情が生まれてしまうのが辛い。 病院に行っても、同じ年代の医大生とすれ違うのがつらい。同じ年代なのに、 私も大学生だったはずなのにと思ってしまう。 通院のたび、腫瘍マーカーの「数値が上がってないといいな」と思いながら病院に行きます。

でも最近は毎回、数値が上がっているので、「何が悪かったのか」「なぜ上がっ たのか」とやるせない気持ちになります。体調もどんどん悪くなっていて、肩こり、手足が痺れやすい、腰痛があり、すぐ疲れてしまいます。薬が多いせいか、動悸や一瞬、息がつまったような感覚に襲われることもあります。 また、手術をした首の前辺りがつりやすくなり、つると痛みが治まるまでじっと耐えなくてはなりません。

自分が病気のせいで、家族にどれだけ心配や迷惑をかけてきたかと思うととても申しわけない気持ちです。もう自分のせいで家族に悲しい思いはさせたくありません。 もとの身体に戻りたい。そう、どんなに願っても、もう戻ることはできません。 この裁判を通じて、甲状腺がん患者に対する補償が実現することを願います

意見陳述要旨　２０２３年３月１５日　　原告１

1、序章

私は、 震災当時高校１年生でした。
家庭科の授業中に地震が発生し、 妊婦体験の道具を身に着けながら地震がすぎるのを待っていました。食器棚を抑える必要があるほど、大きい揺れだったことを覚えています。

翌日予定されていた模擬試験は中止となり、自宅に帰ったのは、１７時頃でした。 家に着くと、１階の壁にはヒビが入り、家具は倒れ、本棚にあった本は散乱していました。 震災の被害があまりにも大きく、恐怖を感じました。すぐにテレビをつけ、そのまま震災のニュースを眺めていました。津波が建物や車を押し流していたシーンが記憶に残っています。

翌日、原発が爆発したニュースを見て、母に言われていつでも避難できるよう準備を始めました。母が運転する車で食料調達をしましたが、スーパーやコンビ二はどこも品薄で、いくつものスーパーを回りました。バックに非常食や服を詰めたりして、慌ただしい生活でした。でも、私自身は、自分の地域は大丈夫だろうと思っていました。

震災で学校は休みになり、そのまま春休みに入りました。カラオケやボウリングなど、 外に出かける頻度も徐々に増えていきました。当時、バンド活動に力を入れていたので、バンドの練習のために自転車でスタジオに通うこともありました。 アジカンやチャットモンチーあたりをよく聞いていて、 その曲のコピーをしていました。友だちと自転車で出かけることについては母親が心配するので、 家族には黙って出かけていました。当時は、放射能のことは全く気にしていませんでした。

原発事故前から牛乳が好きだったので、とくに気にせず、毎日 500ml から１Ｌくらい飲み続けていました。地元産の牛乳が一時的に出荷制限になり、飲めない時期があって悲しかったのを覚えています。４月になって学校が始まってからは、 穏やかな日常を過ごしていました。空地には、 避難者のための仮設住宅が建てられていました。

2、 検診

震災から３年が経った大学１年の頃に、 一斉検査で超音波検診を受けに行きました。会場は結婚式場でした。すぐに検診が終わると思っていたのですが、他の人よりも 3~4 倍長く感じられました。検査技師の女性は、機械を使って何度も同じ箇所を往復させ、う～んと言いながら、首を傾けていて、その姿を見て不安な気持ちになりました。後日、超音波検診の結果が届きました。内容は再検診を受けろというもの。この時点で、 自分の身体に何か良くないことが起きているのでは？と感じていました。

再検診は、自宅からは遠く離れた福島県立医大で受けました。母の運転する車で向かいました。
検査をした「甲状腺センター」の廊下に並んでいる椅子には、多くの患者が待機していて、座りきれず立って待っている人もいました。自分の検査時間まで長くて退屈でした。

再検査では、 穿刺細胞診という検査をやりました。甲状腺がんの疑いのある細胞を吸い取り、 悪性かどうかを判断する検査です。甲状腺のある喉元に、麻酔をすることなく、 細長い針を刺されました。針が

喉を貫通したらどうしよう、変なところに刺さらないだろうかと、通常の注射とは違う怖さを感じていました。1回目はうまくとることができず、 刺した後に、「あれ？」と言いながら、 再び針を刺されました。強い痛みと怖さから、へたくそだな、もうやめてほしい、と心の中で思っていました。2回目もうまくとることができませんでした。痛みと不快感で涙が出ました。結局、1回で済むところを、 3回も刺されることになりました。

1ヶ月後、再度病院を訪れると、医者から、甲状腺乳頭がんと宣告されました。まさか20歳でガン宣告されるとは思っていませんでした。ガンと聞いた瞬間、「もしかして死ぬのか ・・・？」 という気持ちになりました。医者からは、「現状は身体に影響することはありません。ただし、今後ガンが大きくなる可能性があります。その場合、投薬か手術で治療することになります。」と言われました。母が診察室に残って医者と話している間、 診察室の外ですぐに乳頭がんについてスマホで調べました。
【乳頭がん 死亡率】で検索し、「すぐに死に至るガンではない」ことを、【乳頭がん 手術】で検索し、「手術の成功率も高い」 ことを知りました。これらの検索結果を見て、ほっと胸をなでおろしたのを覚えています。この日のがんの大きさは9.4mm。まだ10mmに満たないため、すぐには手術せず、 経過観察をすることになりました。まわりを心配させないように、家族以外にはガンになったことは話さないようにしていました。

3、 手術

ガンだと宣告されてから、半年に1~2回、経過観察するために通院を続けました。
経過観察の度に乳頭がんが少しずつ大きくなり、 自分の体の中で大きくなっていくガンに気持ち悪さを感じていました。そして、 2年ほど経った診察日に、リンパ節に転移するかもしれないと診断されました。ガンは確実に大きくなっていました。

医者には、投薬治療する選択肢も与えられましたが、薬で完治するのを待つより、転移する可能性も考慮し、一刻も早くガンを取り除きたいという気持ちから、手術をすることを選びました。社会人になってからでは時間が取れないと思い、 大学4年の夏休みに手術をすることを決意しました。穿刺細胞診での不信感もあり、母と相談して手術は東京の専門病院で行うことにしました。甲状腺がんの大きさは9.4mmから11.0 mmになっていました。

入院期間は 1 週間程でした。 手術前は緊張と不安でいっぱいでした。「手術が失敗したら ・・・」「後遺症が残ったら ・ ・・」など、 ネガティブな考えばかり浮かんでいました。
そんな不安から、SNSで初めて、ガンであること、これから手術を受けることを発言しました。励ましの言葉を貰ったり、たまたま東京にいた友人がお見舞いに来てくれたおかげで、少しだけ、心を落ち着かせることができました。

手術は全身麻酔で意識を失っている間に終わっていました。手術台で目が覚めた時に、医者から、「無事成功しましたよ」と言われたときは意識が朦朧としつつも安堵したのを覚えています。手術直後は麻酔が効いていたこともあり、 痛みはまったくありませんでした。

問題はその日の夜中でした。
麻酔が切れた途端、あまりの痛みにナースコールを押して、追加の鎮痛剤を投与してもらいました。1人では起き上がることや、トイレに行くこともできませんでした。 痛みでまともにご飯を食べることもできませんでした。

退院後 1 週間は、鎮痛剤なしでご飯を食べるのは困難でした。手術痕の痛みは1ヵ月ほど続き、暫くは、手術痕が日光に当たらないように気を付ける必要がありました。

残念ながら、今でも手術痕はくつきりと残っています。傷に関して聞かれるのが面倒なので、 極力、 手術痕が見えないような服を着るようになりました。

手術後も年に１回くらい検査を受けるように言われており、 現在も定期的に病院で検査をしています。再発することを考えると、気分が落ち込んでしまうので、普段は考えないようにしていますが、病院に行って検査結果を聞くまでは、どうしても不安でいつばいになります。

4、 提訴に至る経緯

さいごに、 私が提訴することを決めた経緯についてお話しします。

大学を卒業し、就職で上京した後、原発事故後に甲状腺ガンになった人達の集まりに参加する機会がありました。 自分は甲状腺の半分を切除するだけで済みましたが、中には全摘出して薬を飲み続けてる人、これから手術を受ける人、ガンになった人の親御さんなど、様々なお話を聞くことができました。

この時まで、自分以外の甲状腺がんになっている人と直接お話することはありませんでした。 そして、自分のように元気ではなく、体調が良くなかったり、落ち込んでふさぎ込んでいる人もいることに同情しました。その過程で、 原発が原因である可能性があることを知りました。

今回この裁判に参加した理由は、原発事故後、甲状腺がんで苦しんでいる人たちの手助けができればと思ったからです。裁判をすることを決めて、他の原告のみなさんと出会い、そのお話も聞いて、自分と同じ気持ちゃ、自分よりつらい気持ちを背負っている人がいるということを知ることができました。

正直な所、この甲状腺がんが原発による放射線の影響を受けているのか、私には分かりません。様々な情報が飛び交っていて、判断が難しいと思っています。

ですが、 可能性が０ではないからこそ、この場で発言をしています。裁判の結果がどうであれ、裁判官の皆様には原告が納得できる結論を出して頂きたいと思っています。 以上

意見陳述要旨　２０２３年3月１５日　原告3

1、 被ばく

今日は3月I5日。12年前のこの日、午後3時を過ぎたちょうど今頃の時間。私の住む町に、高濃度の放射性プルームが襲ってきました。

当時、地元の地方テレビでは、放射能は花粉みたいなもので払ってゴミ袋に入れて１週間おいておけばいいなどと放送していました。そして、枝野官房長官が「直ちに健康に影響はありません」と記者会見で話していたのを鮮明に覚えています。国の人が言うならそうなのかなと思いましたが、家族はそれを見て、そんなはずがないと言っていました。

まだ中３だった私には、何が正しいのかよく分かりませんでしたが、家族の言っていることが間違っているとは思えませんでした。

しばらくして、県内の子どもにヨウ素剤が配られるという噂を耳にしました。私も家族も、とても安堵しました。いつかいつかと心待ちにしていましたが、薬は結局、配られませんでした。 その後、福島医大のお医者さんとその家族のみに配られたということを知り、市、県、国に対して初めて、大きな不信感を抱きました。

不安にかられながらも、あっという間に４月になり、高校に入学しました。かわいい制服の憧れの高校です。でも、楽しみにしていた高校生活は、原発事故の影響で、想像していたものとは大分違いました。

中学時代、運動部に所属していた私は、高校でも運動部に入ろうと楽しみにしていました。
バレーボール、チアリーダーなど、気になる部活は沢山あったけど、母から「外で練習する部活はやめて欲しい」と言われていたので、悩んだ挙句、帰宅部を選択しました。
今考えれば、どうせがんになるんだったら、好きなことをやればよかったと思います。

母は放射能をとても気にしていて、「通学中は側溝の上は線量が高いから避けてね」とか、「あそこは放射能が高いから行かないで」とか「マスクをして」などと、いつも口にしていました。

事故前は、放課後に、よく友達と寄り道をして、公園で遊んだり、食べ歩きをしていました。
高校でも、友達とそんなふうに過ごせると思っていたけれど、いつも遊んでいた公園は草が身長より高く生えていて、人の姿はなく、黄色のテープで封鎖されていました。学校の校庭も土が掘り出されて、黒い袋に入れて山積みにされ、放射線量を測る機械が置かれ、まるで工事現場のようでした。

「でも、放射能は危ないから仕方ない。」きっとみんな同じ気持ちだろうと思っていたけど、気にする友だちはほとんどいませんでした。逆に、放射能の話をすると、気にしすぎという態度を取られるので、
徐々に、放射能の話はしなくなりました。

2、華やかな将来を夢見た高校時代
私は、中学まで勉強嫌いでした。
ところが、高校に入って受けた初めてのテストでまさかの学年１位。やりたい部活もできないし、放課後に外で遊ぶこともできないので、勉強を頑張ってみようと思いました。勉強が楽しく感じ始めた頃、塾や学校の先生から、大学進学を勧められるようになりました。
「東京の大学に行きたい！」
もともと東京に出たいという憧れがあったので、東京の有名な大学に入り、 ドラマ「anego」の篠原涼子みたいに、バリバリ働くキャリアウーマンになりたいと夢見るようになりました。
成績は、ずっとオール５を維持することを目標にしていました。 ところが２年生になり、体育の成績だけ４になってしまいました。 ２年の夏に再開されたプールの影響です。

水泳の授業が始まる前、体育の先生から、授業に参加するかどうか、保護者の「同意書」が配られました。そこには放射能に関しての記載があり、「不参加」を選択しても、成績には影響しないと書いてありました。その言葉を信じて、「不参加」に丸をつけ、体育を休みました。しかし、その言葉は裏切られ、結局、成績を下げられてしまいました。放射能が原因による理不尽な結果に、やるせない気持ちになりました。

オール５は崩れてしまいましたが、大学は、推薦入試で東京の大学を受けました。合格発表があった１２月半ば。帰りのホームルームに、 ドキドキしながら携帯で結果を見ました。
「合格した！」　その日は、とても晴れたポカポカとした陽気で、受験で張り詰めていた気持ちがすっと軽くなったのを覚えています。

3、 崩れ始めた体調

３月に入ると、小さい頃から夢だった東京での１人暮らしが始まりました。友達がたくさんできて、毎

日、遊びと大学とバイトの日々。充実した大学生活でした。
　でも、 1年生の終わり頃、生理が2週間周期で来るようになり、体調に異変を感じました。急激に体重が増え、これまでに経験したことのない肌荒れやむくみ。朝になるとむくみの痛さで目を覚ますようになりました。少し経つと今度は、唾を飲み込むときに異物感を感じるようになりました。

　不安になり、母に相談すると、甲状腺異常の症状だから、すぐに検査に行こうと言われました。3月、お墓参りで帰省した時、福島県の甲状腺検査を受けました。甲状腺検査の会場は、広々とした展示場でした。会場内には、黄色い布で囲われたブースがいくつも設置され、ブースごとに長蛇の列がありました。ブースに入ると、超音波の機械とベットがあり、ベッド脇に検査技師の女性が一人座っていました。検査はすぐに終わるだろうと思っていましたが、女性は首を傾げながら、何度も何度も、首に機械を当て、なかなか終わりませんでした。検査の結果は2ヶ月ほどして実家に届きました。

　結果を見た母から「B判定」の写真と報告の連絡がLINEに入っていました。その時、私はまだ、それほど深刻なこととは思わず、「わかった～！」と二つ返事をしていました。
　ところが数日後、県立医大から実家に、早急に再検査に来るよう伝える電話が2回ほどありました。これは深刻な状況なのかもしれない。私は、甲状腺がんについて、必死にネットで調べました。放射線によって発症した甲状腺がん患者の予後について 書かれた論文も読みました。

　もしがんと診断されたら、手術する病院はどうするか。大学はどうなるのか。夜、自宅に帰ってベッドの中に入ると、そんなことばかりが頭に浮かびました。

4、告知

　2次検査は、福島県立医大と指定されていたので、東京から福島まで行き、受診しました。福島医大の扉をくぐると、古くて暗くてドヨーンとした重い空気を感じました。
でも、2階の内分泌外科に到着すると、先ほど感じた空気とはうって変わり、小さな子どもたちで溢れ、賑やかだった。明るく元気な声が飛び交い、病院であることを忘れてしまいそうでした。待合室で座っていると、お母さんと手を繋いだ小学校1年生くらいの小さな女の子とすれ違いました。明るく無邪気な子が多い中で、その子だけは俯いていました。その不安げな表情は、なぜか今も脳裏に焼き付いています。

　何度か検査に通い、穿刺吸引細胞診をすることになりました。
ベットに横たわり待っていると、先生が、針を持って病室に入ってきました。
「え、こんなに針が太いんですか？」母が驚いていました。

　普段、あまり感情を出さない母が驚いている姿を見て少し怖くなり、針を見ないように、壁を見ることにしました。すると、注射のように針を刺すのではなく、喉に直角に針を刺し、全体重を乗せてきました。 メリメリメリと筋肉を通過するような音が聞こえ、痛いと思う前に、涙が出ていました。

　乳頭がんと告知されたのは、それから1ヶ月後。
午後、診察の時間になっても先生はなかなか来ません。看護師さんが焦った様子でやってきて、手術が長引いているので、1階にあるスタバで待つよう言われました。明るかった外は薄暗くなり病院にはもう人の姿はなく、私たちだけになっていました。先生が手術を終えたと連絡が入り、診察室で待っていると、疲れた様子の先生がやってきました。

　パソコン画面に紫色の気持ち悪い画像が映し出され、何かなと思って見ていると、「この紫になってい

るのがガン細胞です。甲状腺乳頭がんです。」とあっさりと告知を受けました。母は驚いて、言葉が出ない様子でした。反対に、私はとても冷静で、「やっぱりそうだったんだ」と受け止めていました。

私の腫瘍はまだ小さく、通常なら手術せず経過を観察する大きさだと説明されました。でも、私のがんは気管に近く、早急に手術をしなければ、全身に転移する可能性があると、先生は深刻な表情で説明しました。

それを頷いて聞いていたら、先生が急に「気になっているかもしれませんが、このがんは、福島原発事故との因果関係はありません。」そう釘を刺しました。
母と私は、押し黙ったまま会計を終え、病院を出て、駐車場まで沈黙が続きました。
「やっぱりがんだったね」
車に乗り込むと、重苦しい空気を破りたくて、そう一言、口にしました。すると母は、「何がいけなかったんだろう」「もうちょっと注意してればよかった」と言葉を繰り返していました。
「なったものは仕方ないから、早く東京の病院で手術しよう」私は、そう返しました。
車を走らせて少しすると、母は突然、「運転できない」と言い出しました。母は過呼吸気味で、力が入らないような様子でした。少し先にサービスエリアがあったので、そこで休むことにしました。車を止めて外に出ると、ふと音楽が聞こえてきました。当時、流行っていた秦基博さんの「ひまわりの約束」でした。

「どうして君が泣くの、まだ僕も泣いていないのに」
そのフレーズに 2 人はハッと驚いて、お互いに見つめ合いました。母の目は、赤く腫れていました。

「こんな歌詞だったんだ。」2 人でフッと笑い合い、「お腹すいたね」と顔を赤らめて、お店のショーケースに売れ残っていた焼き鳥を 2 本買って、食べました。

5、 手術

手術を受けたのはその半年後、大学 3 年の夏休み前です。テスト後にすぐ教室を出て、急いで病院に向かいました。この日は、すごく晴れていて、とても暑かった。テストから解放され晴れ晴れとした気持ちと初めての入院に対する不安。大学から駅に向かって橋を渡る光景をいまも鮮明に覚えています。

入院したのは都内の大学病院です。事故後から、福島県立医大にはずっと不信感があったので、がんと告知を受けた後、東京の専門病院に転院。さらに、内視鏡手術という傷が目立ちにくい術式があることを知り、手術直前に、この大学病院に転院しました。

案内された病棟は古くて薄暗く、暗い雰囲気が漂っていました。がん患者だけの病棟だったせいか、若い患者は私だけ。でも、実力のある有名な先生が主治医だったので、手術さえ終われば、元の体に戻れるとワクワクした気持ちでした。私は、母と雑貨屋さんで買ったお気に入りのふわふわのバスタオルをベットに敷き、ファッション誌を並べ、叔母さんにもらった 3 個のお守りも机に置いて、ベッドを自分の秘密基地みたいにセットしました。

しばらくして、主治医が私のところにやってくると、目を少し見開いて驚き、こんなふうに病室のベッドを自分の部屋のようにして、楽しんでいる患者さんは初めてだと笑われました。

両親は、二人とも仕事を休み、入院から退院まで毎日、私のアパートから病院に通い、病室で付き添ってくれました。そのおかげもあり、不安や寂しさはありませんでした。手術当日も、特に緊張はありませ

んでした。私の前に入っていた手術も順調に終わり、予定よりも早く手術の準備が始まりました。
オペ室の手前まで、母と病院を紹介してくれたＳさんと一緒に行きました。この日も天気が良く、これでがんがなくなるんだとウキウキした気分でした。オペ室の手前で、まるでどこかに遊びに行くかのように「行ってくるね～」と元気に手を振ったことを覚えています。

オペ室に入ると中は新しく、 ドラマでみるオペ室よりもカラフルで綺麗でした。10 人ほどの看護師さんと青い手術着を着たドクターが忙しく動き回っていましたが、私の姿を見るとみんな気遣って、やさしく声をかけてくれました。ベッドの上に横たわると、少しチクっとしますよと言われ、左腕に麻酔を打たれました。すると、今までに感じたことのないほど腕がジンジンと痛み痺れて、ドクドクと熱い液体が体の中に入っていきました。まるで毒を入れられている感覚で、液体が肘まできたあたりで、意識がなくなりました。

それから、どれくらい経ったのか。「手術が終わりましたよ」と肩を叩かれました。意識はあっても目は開かず、返事もできません。ストレッチャーに乗せられ、病室に戻ると両親とＳさんの３人が待っていました。ベッドに到着した頃には、目は開けることができましたが、声は出ません。すると急激に、気持ち悪さとひどい寒気が襲ってきました。麻酔の副作用なのか。布団をかけられても、何をしても寒い。熱は３５度１分まで下がり、ガクガクと震えていました。
その様子を見ていたＳさんは「いつもの笑顔からは想像がつかない」と涙目になり、「とても見ていることができない。」と肩を落として病院を後にしました。その言葉に、自分が変わり果てた姿であることを悟りました。私は、お見舞いに来てくれたことのお礼を伝えたかったけれど、伝えられませんでした。

6、 元に戻らなかった

手術が終われば、がんがなくなり、元の自分に戻れる。手術前は、そう期待していました。でも、そううまくはいきませんでした。
手術後、体調を崩しやすくなり、月に一回以上、風邪をひくようになりました。カフェでのハードなアルバイトは続けられず、事務のアルバイトに切り替え、 バイトの収入は半分以下になりました。何をするにしても健康を一番に考えて、何事もセーブする癖がつきました。身体に悪い食品は避け、友だちと夜中まで遊ぶことも、徹夜することもなくなりました。就職活動も、体のことばかり考えて、やりたい仕事がわからなくなりました。病気になる前は、メディアの仕事に就きたいと思っていましたが激務だから辞めた方がいいと言われ、諦めました。 昔は、やりたいことは何でも行動に移してきたのに、そういう気持ちはいつの間にかなくなっていました。

就活の時、病歴を書かなければならない企業もありました。
がんのことを書いた途端、落とされることが続き、ぼかすようになりました。そのたびに、罪悪感でモヤモヤした。結局、入社したのは、広告代理店です。綺麗なオフィスでバリバリ働くという夢は実現しました。

でも、体調が不安で、嬉しいといった気持ちはそれほど湧きませんでした。実際に入社後も、月に一度は風邪を引き、常に体調が悪い状態が続きました。会社では、頻繁に飲み会がありました。でも、体に悪いお酒を飲むことが苦痛でした。ストレスも重なり、次第に風邪が治らなくなりました。最後は、気管支炎から喘息、肺炎になり、入社から１年半後。仕事をやめざるを得ませんでした。

コロナが流行し始めたのは、その半年後です。熱が出ても病院に行けない不安な日々。人を頼れず、初めて孤独を感じました。

本来なら、第二新卒として就職活動をすることのできる年齢でしたが、咳と熱が頻繁に出ていたので、体調が復活するまで自宅で療養することにしました。その間、友人は会社を辞め希望の職種に転職し、キャリアアップして楽しそうに働いている。私は今、体に負荷をかからない事務の仕事をしています。やりたい仕事があっても、自信が持てない。社会人 6 年目になるけれど、それに見合った能力がなく、何も成長できていないと感じています。

7、裁判

私が裁判をしたいと思ったのは、今から 7 年前。がんと診断された日です。
県立医大で、がんと告知された直後に言われた「原発事故と因果関係はありません」という言葉に強い不信感を抱き、このことが、私を裁判に駆り立てました。

「直ちに健康影響はない」という原発事故後の枝野元官房長官の言葉。「アンダーコントロール」というオリンピック招致時の安倍元首相の言葉。がんになる前から、国や県に対して強い不信感があったので、決断に時間はかからなかった。

そして、もう一つ。

私の背中を押したのは、この病気が家族を苦しめているからです。東京から福島まで大学を休み何度も検査をする過程で奨学金をフィにしてしまったり、保険対象外の内視鏡手術など多額の出費をしたり、家計にも大きな負担をかけてきました。そして、精神的な負荷はそれ以上です。 このがんは、ただのがんではありません。差別や中傷を受ける可能性もある。一人っ子の私を大切に育ててくれた両親と家族は、常に私の将来を心配し、胸を痛めています。告知を受けた日の母の涙は忘れることができません。

でも、提訴をするにしても、当時はまだ大学生で未成年。アルバイト代は生活費に回すので精一杯。一人で裁判を起こすことは現実的ではありませんでした。「これは、公害事件として位置付けられるから、支援団体があるかもしれない。」ネットで何度も検索しました。でも、そんな団体は一つもありませんでした。「あー。日本の誰ひとり、このことに関心ないんだな」と絶望的な気持ちでした。

でも、様々な方が支えてくださり、去年提訴することができました。これまでずっと、1 人戦うことになるだろうと思っていたので、他にも原告になる人がいると聞いた時は、驚きました。

提訴前、原告同士の繋がりはほとんどありませんでした。どこか壁があって、お互いのことを話せませんでした。 関係性が変わったのは、原告 2 番のあおいちゃんがトップバッターで意見陳述を頑張ってくれたこと。その時、初めてあおいちゃんの辛かった体験を知ることができ、それから、少しずつお互いに辛かったことや、治療のことを話せるようになり、この一年で、絆を深めることができたと感じています。

原告全員の意見陳述を認めてくださり、裁判官の皆さんにはとても感謝しています。
私たち原告の中には、再発や転移をしている子もいます。生活が厳しい子もいます。でも、誰も手を差し伸べてくれません。しまいには、EU への書簡で元首相が書いた「甲状腺がんで苦しんでいる」という一節を、岸田首相も、環境大臣もそして内堀福島県知事までもが否定をしています。
裁判所には、政府の意向を考慮することなく、起きた事実だけを捉えて、しつかりと判断してほしいです。わたしよりも幼い子どもたちが被ばくをして苦しんでいて、今後も健康被害が生まれ、苦しむ子どもたちが増えてくる可能性がある。弱い立場にある子どもたちを見捨てずに、未来のある子どもたちがしつかりと救済され、幸せな人生を生きられる世の中にしてほしい。そう願っています。